

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 100 回 今こそ「田中角栄」～人心掌握の基本

小生かつて、「田中角栄」に3度ほどお会いしたことがある。最初は、亡くなった小淵恵三先生について、東京目白の田中邸でお目にかかった。まだ独身、若かりし小生を見て、

「ほうほう、若くて元気で何よりだ！ 今、どこに住んでるの？」

「本郷の3丁目です」

「そりゃ、近くて結構、たまには遊びにきなさい」

当時、田中角栄絶頂期、お決まりの下駄履きスタイルで、小淵先生と一緒にとはいえず、この馬の骨か分からん若造に、親しく声をかけてくれた田中角栄、すっかり舞い上がってしまって、握手した右手を大切そうに、「トイレへ行っても手を洗わない...」

その心境は、モー娘を追っかけるミーハーファンと同じだったかもしれない。

2 度目もやはり、小淵先生と一緒に、同じ田中邸。例のスタイルで片手を挙げ、ニコニコしながらやってきて、いきなり

「いよー、飯島君！」

これには正直、ぶったまげた。なっ、なっ、なんで、僕の名前憶えているの？？

ミーハー心理がいつの間にか「感動」となり、やがて「尊敬の念」に変わるまで、あまり時を要さなかった。「人心掌握の術に長けた角栄」...マスコミは、彼の枕詞のように使っていた言葉だが、そんな陳腐なニュアンスはなく、実際に体験した人は正に、「感銘」だけが残っていく、小生いまだに「角栄信者」と公言してはばからないのが、何よりの証拠かもしれない。

角栄には及びもしないが、小生も年間、恐らく何千人単位で人と会う。それが仕事と知っている。が、残念ながら、顔と名前が結びつかないこと、往々にしてある。とりわけ50歳を過ぎた頃から、よく物忘れをする。挨拶をされ「どうも、いつもお世話になります...」とは言うものの、果たして、「あの人誰だっけ??」

「いらっしやいませー」と横っちょ向きながら迎えられるレストランと、「お待ちしておりました、飯島様」とやられたら、こりゃ、比較のしようがないだろう。

人の顔と名前と憶えることは、レストランや角栄に限らず、基本中の基本。いつしか、この基本ができなくなっている自分に、ショックを隠しきれないでいる。それは、「老い」や「驕り」や「慣れ」、それら全てに起因しているかもしれない。いずれにしる「基本」を疎かにし、絶え間ない努力を忘れてしまった「証」であろう。老いをフォローする工夫、驕りをおさめる純真さ、慣れを慣習化させない慎重さ、... プルトーザー的イメージで見えない角栄の、もっと本質を学ぶべき時が、今、なのかも知れない。